

# 本州出土の突瘤文・刺突文系土器群とその意味

関 根 達 人

## はじめに

津軽海峡を跨いで縄文時代に展開した文化交流は、近頃は自然科学的分析によって明らかになったヒスイや黒曜石といったモノの移動を例に論じられることが多いが、古くは円筒土器や亀ヶ岡式土器など土器の分布の広がりとして認識されていた。

本稿で扱う縄文時代後期後半～晩期初頭には、北海道を主たる分布域とする突瘤文土器が青森県内でも確認されている。内側から器壁を突いて外側に瘤状の突起を施す突瘤文土器は、判別が容易なことから注目されてきた。鈴木克彦氏は、本州で突瘤文土器が出土した遺跡として、むつ市大湊近川遺跡、今別町二ツ石遺跡、平館村尻高（4）遺跡、平賀町小金森遺跡、大間町ドウマンチャ貝塚の5遺跡を挙げ、「青森県で出土している突瘤文土器は大湊近川式と、一部がそれ以降（6式）に伴うものだと考えるのである」とし（鈴木 1997b）、後に突瘤文土器の一部は晩期に属すると訂正した（鈴木 2001）。鈴木氏は、突瘤文の時期に生じた北海道系土器の南下は本州北端の限られた地域でのみ認められる現象であり、本州の土器に大きな影響を与えることはなかったとの見方を示す（鈴木 2001）。福田友之氏は、突瘤文土器が出土した尻高（4）遺跡や大湊近川遺跡から、北海道産黒曜石が出土していることから、縄文時代後期後半には海峡を越えて北からやってきた移住者がいたと推定し、津軽海峡をめぐる文化交流史の中で画期と捉えている（福田 1988・1990、註1）。

一方、北海道では石狩低地帯を中心に近年、恵庭市カリンバ3遺跡（上屋ほか 2003）、同西島松5遺跡、千歳市美々4遺跡（熊谷・藤井 1998）、同キウス4遺跡（佐川ほか 1998・2003a・2003b、高橋ほか 2001）、苫小牧市柏原5遺跡（佐藤ほか 1997、工藤 2000）など後期後半から晩期初頭の大規模な遺跡が調査され、概期の土器編年を整備するための資料が多数蓄積されている。

筆者は、青森県北津軽郡中里町深郷田遺跡出土資料の中に新たに突瘤文土器を確認した。深郷田遺跡出土土器には、これまで注目を集めてきた突瘤文以外にも、特徴的な形状や用いられ方を示す刺突文や、地文である縄文の上に細く鋭い沈線で文様を描き、その後磨り消しなどの調整を一切加えない施文法（以下「縄文地沈線文手法」と仮称）など、北海道の土器に特徴的と見られる要素が見いだされた。本稿では、後期後半から晩期前葉の時期にかけて本州北部の遺跡から出土する、そのような北海道的様相を持つ土器を「突瘤文・刺突文系土器群」と呼ぶ。本稿は、良好な一括資料を用いて、所謂「瘤付土器」との相伴関係から「突瘤文・刺突文系土器群」の編年的位置を明らかにし、その上で津軽海峡を越えて展開した交流関係の諸相について論究することを目的とする。

## 1. 深郷田遺跡出土の後晩期縄文土器

### ①遺跡の概要と昭和37年の調査

深郷田遺跡は、青森県北津軽郡中里町深郷田字富森に位置する。遺跡は、津軽中山山地から派生した丘陵の突端、岩木川によって形成された沖積地に面する場所に立地する。遺跡の標高は10m前後で、丘陵の端から東側の沖積面まではおよそ5mほどの比高差がある。遺跡の北側には、宮野沢川によって開析された沢地が広がっている。

深郷田遺跡は、昭和3年発行の『日本石器時代人民遺物発見地名表』にも登場するなど、津軽北部では古くから知られた遺跡の一つであった。学史的には、昭和14年8月の発掘調査で出土した土器を基に、白崎高保氏により円筒下層a式に先行する前期初頭の土器型式として「深郷田式」が設定されたことで有名である。しかし深郷田遺跡の範囲は広く、地点により縄文時代前期、中期、後期、晩期、古代と様々な時期の遺物が採集されている。

本論で扱う資料は、昭和37年、十三湖干拓工事に伴う宮野沢川護岸工事の際、深郷田の丘陵先端部が削平されることとなり、中里町史編纂事業の一環として行われた発掘調査で出土したものである。発掘調査は成田末五郎・佐藤達夫・渡辺兼庸・佐藤仁の4名を責任者として、4月16～20日と10月22～29日の2回行われた。調査の概要は、成田末五郎氏により『中里町誌』（成田1965）のなかで述べられているが、調査区の位置や遺構配置図、層序を示す断面図等を欠いており、調査内容は、文章と僅かばかりの写真および土器の拓影図から推察するほかない。出土資料は、中里町立博物館の開館に先立ち、平成9年に調査担当者の一人である渡辺兼庸氏から地元に戻却され、現在中里町立博物館に所蔵されている。

中里町立博物館に展示された深郷田遺跡出土資料の中に、突瘤文が施文された土器を確認した筆者は、資料の実態を明らかにするため、渡辺氏から寄贈された資料のなかから後晩期縄文土器の抽出を行った。その結果、土器に付された註記から、縄文時代後晩期の土器は、1962年4月調査の「11号ピット」・「22号ピット」・「Ⅱ-2」と、同年9月調査の「桐畑溝ノ中」から出土していることが判明した。このうち「11号ピット」に関しては、『中里町誌』の記述から、丘陵先端部に近い場所であることが特定できる。『中里町誌』によれば、4月の調査では「11号ピット」の東側に位置するE地点から大洞B式期の竪穴住居跡が検出されたことが判るが、「22号ピット」・「Ⅱ-2」と、9月調査の「桐畑溝ノ中」の意味するところは不明である。しかし、後述するように、これら土器に記された註記毎に、土器の型式内容に「まとまり」が見られる点は重要である。

### ②深郷田遺跡出土の後晩期縄文土器

ここでは、昭和37年4月調査の「11号ピット」・「22号ピット」・「Ⅱ-2」と、同年9月調査の「桐畑溝ノ中」から出土した後晩期縄文土器について述べる。このうち、突瘤文・刺突文系土器は「Ⅱ-2」ならびに「11号ピット」から出土している。

#### 【Ⅱ-2出土土器】(第1図)

1～7と12の深鉢の口縁よりやや下がった位置に突瘤が認められる。3・8～11は小片のため突瘤はみられないが、突瘤を施した深鉢の可能性が高い。これら突瘤を有する深鉢は、縄文のもの(1～3)と、縄文地に平行沈線を施すもの(4～12)とがあり、さらに突瘤と沈線との位置

関係で細分される。平坦口縁が多いが、小波状となるもの(12)も認められる。口縁部は肥厚せず、その断面形はやや丸みを帯びた角形のもの最も多く、内削ぎのものは少ない。縄文はLR斜縄文が多く、帯状や羽状を呈するものは存在しない。内面はナデもしくは雑なミガキ調整が施されている。これら突瘤を有する土器は、概して比較的器壁が薄く、明るい色調に硬く焼き締まっている。

13・15・16は口縁部に小突起を有し外面に斜縄文を施した粗製深鉢で、13は小突起下に豆粒状の瘤が貼付されている。14はLR縄文の上に細い沈線で鋸歯状?の文様を描いた縄文地沈線文手法の土器である。

17～20は刺突文を有する。17は小波状口縁で、ナデを施した器面に縦長の刻みに近い横位の刺突列を2段(以上)施している。18～20は平坦口縁で、LR斜縄文の上に斜め横方向から連続的な刺突を加えており、刺突の左右どちらか片側に刺突の際に生じた粘土の捲れ返りが看取される。いずれも小破片のため、文様構成を窺い知ることは出来ないが、刺突列は水平とは限らないことから、連続する刺突によりモチーフを表現していた可能性が高い。

22は口縁部に小突起を有する浅鉢で、外面には疎らな縄文と細い複数の弧線が施されている。

23～25は無文土器である。23と24は深鉢、25は鉢と思われる。23は口唇部に斜め方向の刻みを施し、小波状としている。

26～29は晩期前葉の土器で、26～28は深鉢、29は注口土器である。30は後期中葉の口縁部に刻目帯を有する鉢もしくは深鉢であろう。

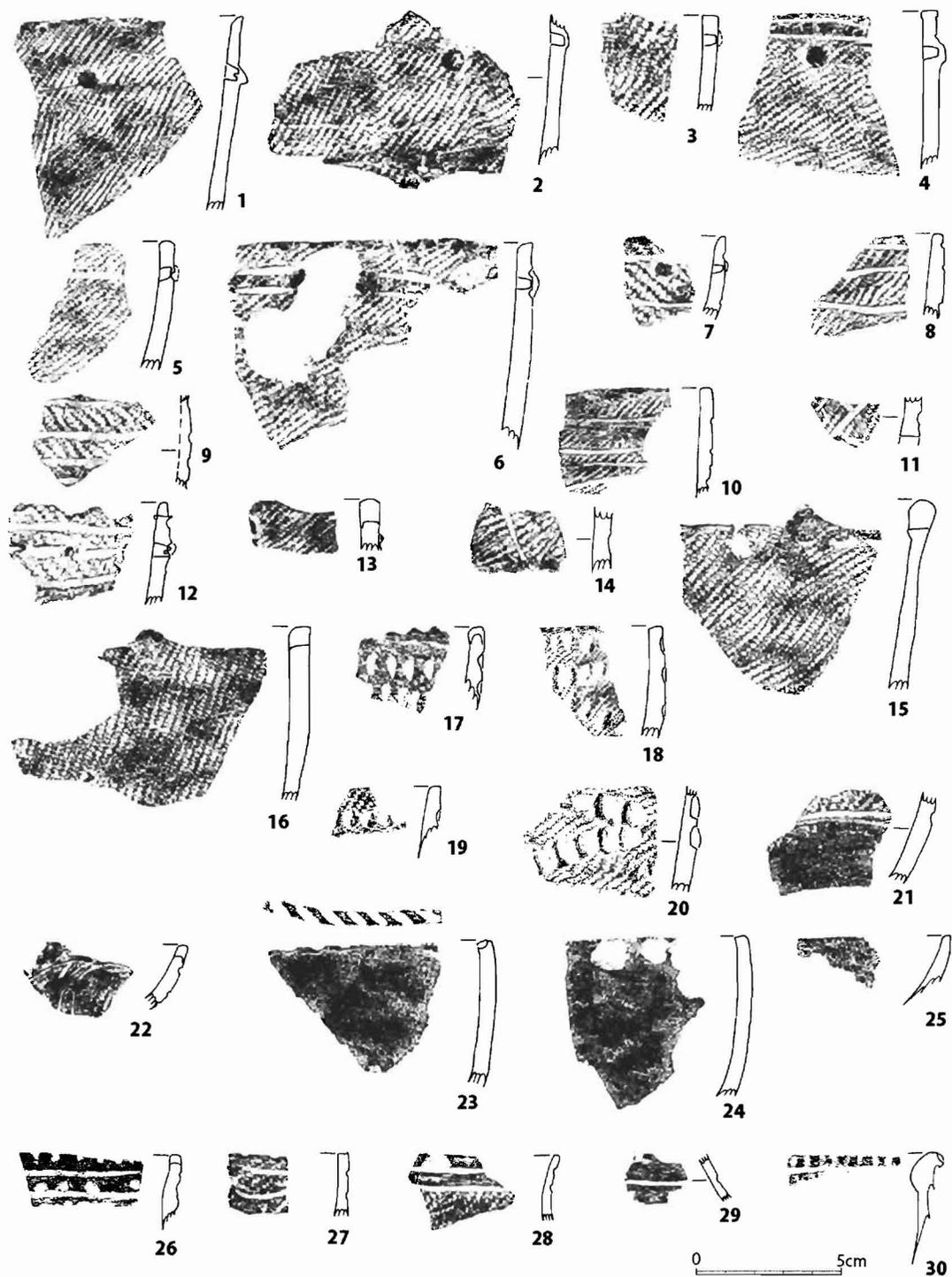
「Ⅱ-2」と註記された土器は、混入した一部の資料(26～30)を除けば、後期後葉の土器のセットとして捉えることが可能と考える。その最大の特徴は、器面を飾る突瘤文と刺突文にある。東北地方の該期の土器によく見られる貼瘤は、突瘤に比べ著しく少なく客体的である。突瘤文を施した土器と刺突文を施した土器は、文様こそ違うものの、口縁部の形状、縄文、調整、焼成など共通する要素が多い。

#### 【11号ピット出土土器】(第2図)

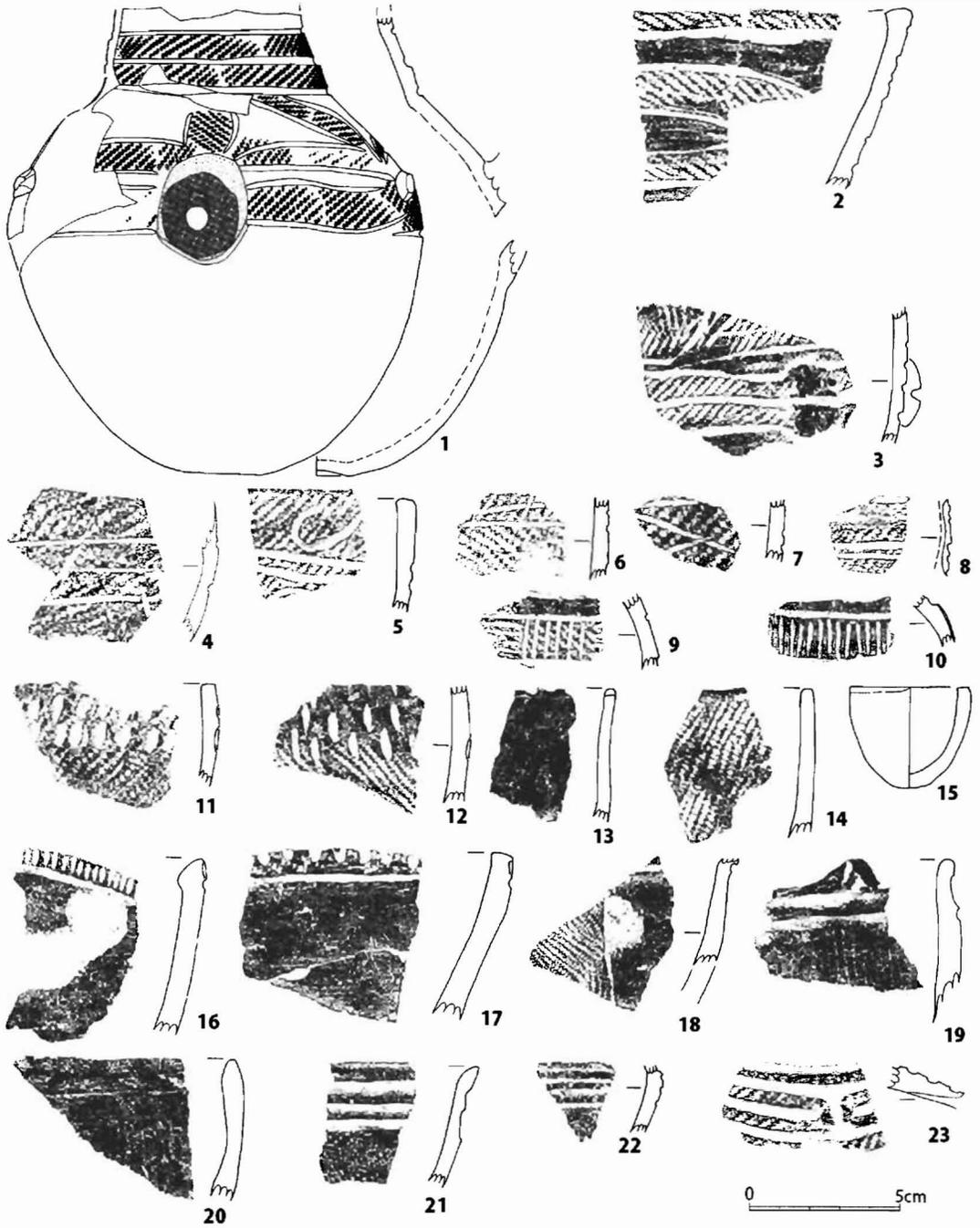
後期中葉(16～18)、後期後葉～晩期前葉(1～15)、晩期後葉(19～23)など様々な時期のものが混在している。そのなかで注目すべきは、縄文地沈線文手法のみられる4～9と刺突文のある11・12の資料である。11号ピット出土土器に突瘤文自体は確認されないものの、5や9のように縄文地沈線文手法によって描かれたモチーフには、北海道の突瘤文土器群と共通するものが認められる。11・12に見られる刺突は粘土の捲れ返りを伴わず、縦長の刻目に近い。11は地となる縄文の上に口縁に平行して2列の刺突列が巡る。12は無文帯に刺突を加えている。11・12のような特徴を有する土器は、北海道檜山郡上ノ国町竹内屋敷遺跡を標式とする「上ノ国式」(大場・松崎・渡辺1961)に見られ、松前町高野遺跡出土資料(峰山1974)にも類例が多数認められる。

#### 【22号ピット出土土器】(第3図)

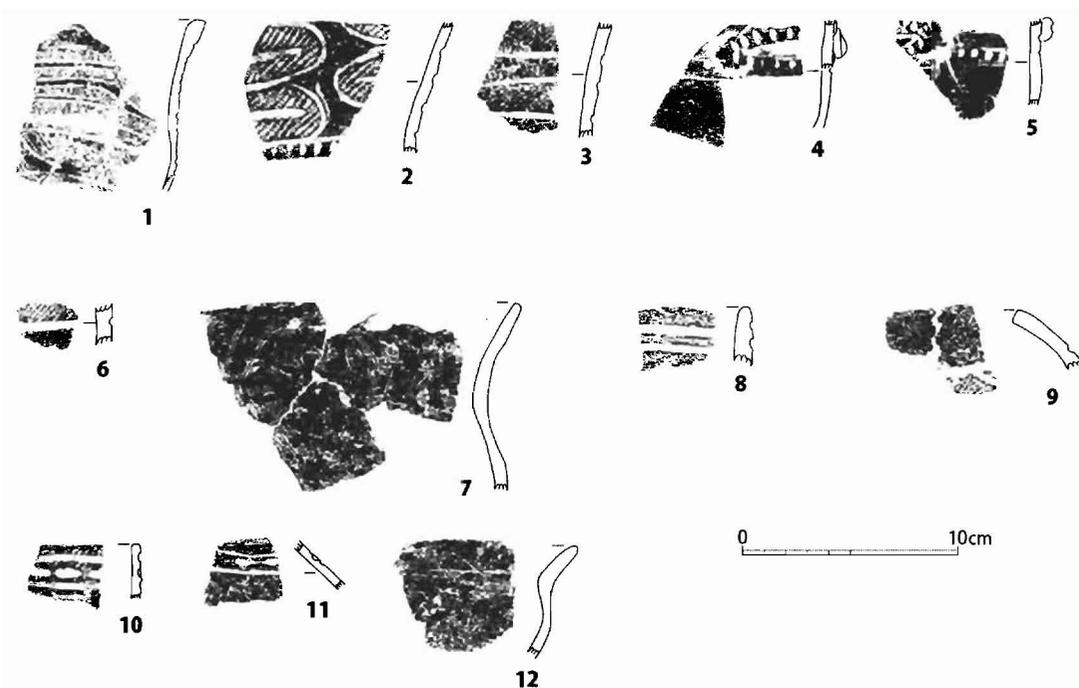
後期中葉から晩期初頭の土器が出土している。1は右下がりの入組帯状文のなかに細密の刻目を施した小型の鉢形土器で、2・3とともに後期最終末に位置づけられる。4・5はそれより一段階前(後期後葉)の文様帯内に刺突を充填した装飾深鉢である。9は後期中葉に、6～8と10～12は晩期初頭に位置づけられよう。



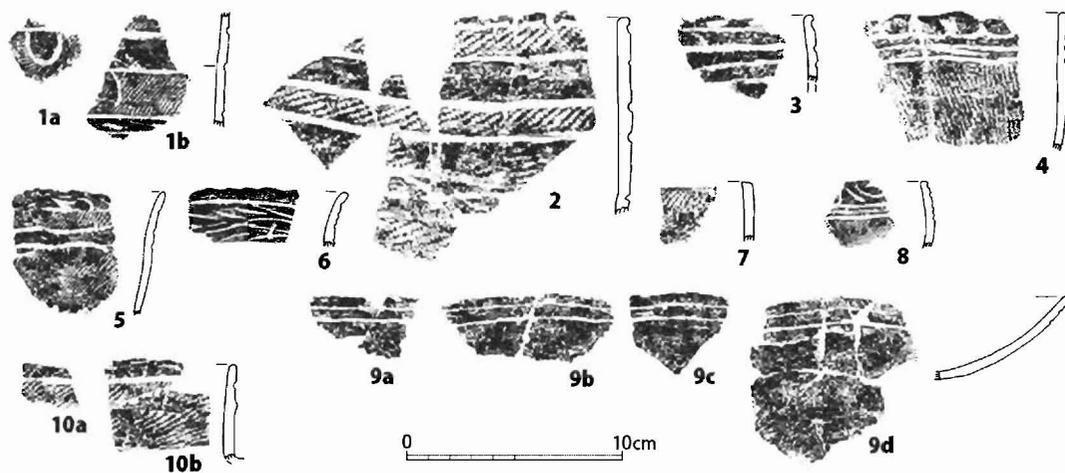
第1図 深郷田遺跡 1962年4月調査「II-2」出土土器



第2図 深郷田遺跡 1962年4月調査「11号ピット」出土土器



第3図 深郷田遺跡 1962年4月調査「22号ピット」出土土器



第4図 深郷田遺跡 1962年9月調査「桐畑溝ノ中」出土土器

## 【桐畑溝ノ中出土土器】（第4図）

晩期初頭「大洞B式」期の良好な資料である。1は僅かに括れを残す装飾深鉢。2～4は口縁部が直立し、そこに沈線文が展開する装飾深鉢で、口縁は小波状を呈する。4・6は、短く外反する口頸部に鉤状・矢羽根状の文様を有する小型の深鉢。8は鉢、9は浅鉢、10は壺形土器である。

## 2. 出土事例の検討

管見に拠れば、前節で資料紹介した深郷田遺跡を含め、東北部の11遺跡で突瘤文・刺突文系土器の出土が確認できる。地域別には、津軽地方7遺跡、下北地方3遺跡、南部地方1遺跡となる（第5図）。以下、この地域順に、各出土事例について述べる。

### （1）津軽地方

【宇鉄遺跡】 所在地：青森県東津軽郡三厩村字上平（文献：葛西ほか1995）

津軽半島の北西端、竜飛岬にほど近い三厩村の宇鉄遺跡は、晩期後半から弥生時代の遺跡として有名だが、地点によっては縄文時代中期から晩期前半の遺物も出土する。C地区における1994年の調査でC-3区のⅡ層から、同一個体に属する4片の突瘤文土器が発見されている（第10図1）。この土器は口縁部に二個一對の小突起を有し、口縁部の文様帯には、突起と突起を結ぶ形で縄文地沈線手法により上向きの弧線が3重に施される。小突起の小突起に挟まれた谷部、すなわち弧線と弧線が隣り合う位置には、左右から摘み縦長となった突瘤が配置されている。突瘤の下には、弧線と弧線を繋ぐ形で短い二重の弧線が認められる。口唇部は肥厚せず、角は丸みを帯びて調整されている。

【二ツ石遺跡】 所在地：青森県東津軽郡今別町大字浜名字二ツ石（文献：遠藤ほか1989）

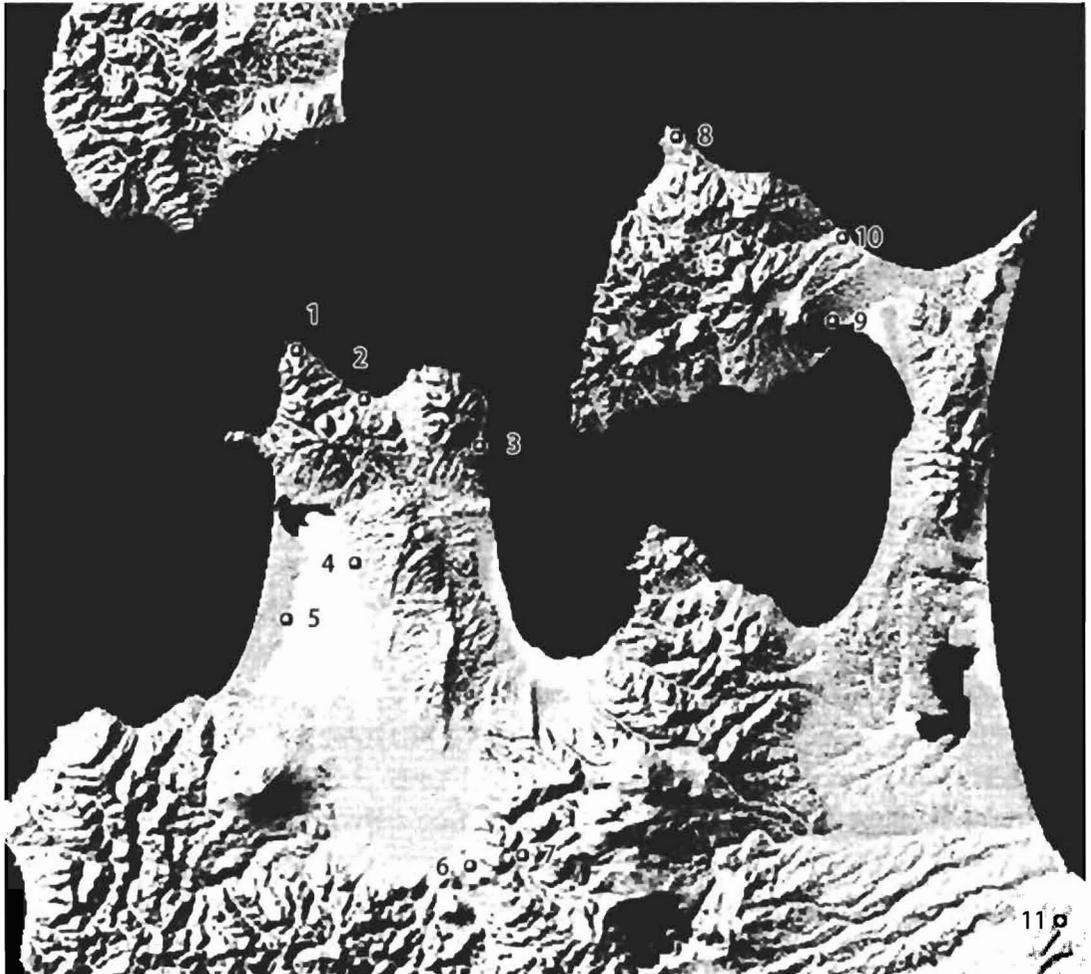
津軽海峡の三厩湾を臨む今別町の二ツ石遺跡では、後期後半の竪穴住居跡2棟が検出され、うち第3号竪穴住居跡の床面・埋土最下層から出土した一括資料の中に、突瘤文の施された深鉢が1点が含まれている（第6図13）。この深鉢は、口唇部が内削ぎで、外面は横方向に回転したRL縄文が施され、内面は雑なナデ調整がなされている。縄文原体は短く、かつ横方向に展開する帯縄文には隙間が見られる。突瘤は、口縁部から約2.5cm下のところを器面に対してほぼ直交する角度でなされている。突瘤は、3cm前後の間隔をおいて器面を一巡する。

【尻高（4）遺跡】 所在地：青森県東津軽郡平館村大字今津字尻高（文献：岡田ほか1985）

陸奥湾の入口、平館海峡を臨む平館村尻高（4）遺跡では、後期の竪穴住居跡6棟が検出され、うち第6号、第7号竪穴住居跡の床面と遺物包含層から突瘤文土器が出土している（第7図）。

第6号竪穴住居跡の床面一括資料にみられる突瘤文土器は大部分が、口唇部が内削ぎとなる深鉢である（第7図1～12）。これらは縄文とのみ組み合うものと、縄文および沈線文と組み合うものとに大別される。後者は、突瘤文を挟んでその上下に平行沈線を伴っており、さらに突瘤文と突瘤文の間に短沈線を施すものと、突瘤文の間をジグザグに縫うように鋸歯文を施すものとに細分できる。突瘤の左右を指で摘み縦長の瘤とするものも認められる。突瘤文土器にはLRもしくはRL原体を用いた斜行縄文が施される。突瘤文土器には、貼瘤を有する装飾深鉢、口縁部が小波状を呈する粗製深鉢、注口土器、香炉形土器などが共伴して出土している。

第7号住居跡では、床面から突瘤を有する深鉢（第7図26～28）が、床面に掘られた土坑内か



1. 宇鉄遺跡 2. ニツ石遺跡 3. 尻高(4)遺跡 4. 深郷田遺跡 5. 亀ヶ岡遺跡 6. 小金森遺跡  
7. 一ノ渡遺跡 8. ドウマンチャ貝塚 9. 大湊近川遺跡 10. 水木沢遺跡 11. 風張(1)遺跡

#### 第5図 本州北部の突瘤文・刺突文系土器出土遺跡

らは縄文地沈線文手法により鋸歯文と平行沈線文を施した台付鉢（第7図25）が出土している。

遺物包含層から出土した突瘤文土器は1個体分である（第7図29）。この土器は粘土の貼り付けによる低い突起を有する深鉢で、突瘤文の上下には平行沈線を有する。

**【深郷田遺跡】** 所在地：青森県北津軽郡中里町深郷田字富森（文献：本稿）

詳細は前節参照のこと。

**【亀ヶ岡遺跡】** 所在地：青森県西津軽郡木造町館岡字沢根（文献：青森県立郷土館1984）

亀ヶ岡遺跡では、青森県立郷土館による雷電宮地区の調査で、道南の後期末から晩期初頭の土器に特有の刺突列を施した粗製土器が3点出土している（第10図8～10）。刺突は、口縁からやや下がった位置の縄文の上に、竹管ないし棒状の工具によって、右横方向もしくは斜め下方から施されている。刺突に伴う粘土の捲れ返りはほとんど認められず、刺突の形状は長細い三角形に近い。口唇部の

断面はいずれも隅丸の角形に近い形状で、端面はほぼ平らである。

**【小金森遺跡】** 所在地：青森県南津軽郡平賀町大字唐竹字小金森（文献：葛西 1974）

津軽平野の南西縁辺に位置する平賀町小金森遺跡では、V-6区の第2層下部より、全体形状の判る突瘤文土器が1点出土している。（第7図45）。口径20.8cm、底径5.7cm、高さ27cmの深鉢で、底部からの立ち上がり部分はやや丸みを帯びている。口唇部は内削ぎ状を呈し、端面には縄文が施されている。外面を飾る羽状縄文には、短めの原体が用いられている。口縁部からやや下がった位置に、3cm程度の間隔で突瘤を施し、突瘤文を挟んで上下に平行沈線を巡らす。

**【一ノ渡遺跡】** 所在地：青森県黒石市沖浦字一ノ渡村上（文献：一町田・畠山 1984）

南八甲田連峰を水源とする浅瀬石川のの上流山間部に位置する黒石市一ノ渡遺跡では、遺構外から縄文を地文とし、口縁からやや下がった位置に刺突を2ないし3列を加えた土器が7点、5個体分出土している（第10図11～17）。いずれも口唇部は肥厚せず、端面が平らな角状ないし、丸みを帯びた形状を呈する。刺突には、円形のもの、片側に粘土の捲れを伴う所謂「爪形」状のもの、粘土の捲れ返りを伴わない長細い三角形を呈するもの、以上3種が認められる。円形の刺突を加えたものは、刺突列の間に横位の平行沈線が3条引かれている。

## （2）下北地方

**【大湊近川遺跡】** 所在地：青森県むつ市大湊浜町220（文献：三宅ほか 1987）

陸奥湾の北東部、大湊湾を臨むむつ市大湊近川遺跡では、後期後半の竪穴住居跡11棟、土坑27基が検出され、突瘤文・刺突文土器を含む良好な一括資料が多数発見された（第8・9図）。

突瘤文は、縄文が施される粗製の深鉢、縄文の上に各種の沈線文が展開する大波状口縁の深鉢、縄文の上に平行沈線が引かれた鉢などの器種に用いられている。突瘤を伴う粗製深鉢の口縁は、平坦なものと同突起を有するものがある。口唇部は肥厚せず、内削ぎのものと端面が角状ないし丸みを帯びた形に整形されるものの両者が存在する。

刺突には、①器面に対して斜め横方向から棒状の施文具を連続的に突き刺し、片側に粘土の捲れを伴うタイプのもの、②爪ないし半裁竹管のような施文具による粘土の捲れ返りを伴わない三日月形のもの、③先端の尖った針状の工具によるもの、の3種に大別される。①の刺突は主として装飾深鉢にみられ、貼瘤と同時に用いられることが多い。②の刺突は、地文である縄文の上に列状に施文されたり、沈線に沿って連続的に使われたりする。③の刺突は、注口土器や香炉形土器において沈線による区画内を充填するのに用いられている。①のタイプの刺突が、後述するように東北地方の瘤付土器のある段階に普遍的に存在するのに対して、②と③のタイプの刺突は、使われ方を含めて本来的には北海道の土器に特徴的である。深鉢・壺・注口土器には、縄文地沈線文手法により鋸歯文や弧線連結文などの文様を描く例が認められる（第8図3・14・15・29・34・35、第9図30）。

口縁部に配された外側に強く張り出すタイプの貼瘤は、上面観が二等辺三角形を呈し、上端面が口唇の延長として調整される点が特徴的である（第9図40）。この特徴的な貼瘤は、上端面にしばしば沈線や刺突などの装飾が加えられる。このようなタイプの貼瘤は、東北地方の所謂瘤付土器には本来存在しておらず、本来北海道の土器に由来する。

括れを有する深鉢には頸部に1段ないし2段の無文帯を持つもの（第8図2・17・22・35、第9

図 30・40) が目立つが、このような文様帯の配置も東北地方の瘤付土器には極めて稀な存在であり、北海道の突瘤文土器群に由来する。

遺構内から出土したこれら後期後半の一括資料群は、遺構の新旧関係と土器の型式学的特徴から、新旧 2 時期に細分可能と考える。

古段階には、調査区の北よりの地区、すなわち標高 25 m 前後の第 2 段丘面とその南斜面で検出された第 101・102・105・107・108 号竪穴住居跡出土資料が相当する (第 8 図)。第 101 号竪穴住居跡は、新段階とした第 120 号土坑に切られている。最も盛んに貼瘤が用いられる段階にあたる。

新段階には、調査区の南よりの地区、斜面から領毛川に近い氾濫原で検出された第 203・206 号竪穴住居跡 (206 号竪穴住居跡に関しては床面出土のもののみ) と、段丘上に位置する第 102・120・141 号土坑出土資料が相当する (第 9 図 1～44)。貼瘤の多くは、捲れ返りを伴う刺突へと省略され、文様の要所要所に残るのみとなる。

**【ドウマンチャ貝塚】** 所在地：青森県下北郡大間町大間字大間平 (文献：江坂ほか 1967)

下北半島の北端、大間岬にほど近い大間町ドウマンチャ貝塚では、地文である縄文のうえに突瘤を施した土器 2 点と、同じく刺突を施した土器 1 点が出土している (第 10 図 2～4)。突瘤が施された土器はいずれも口縁部に小突起を有し、口唇部の断面は丸みを帯びている。突瘤には何も手を加えないものと、突瘤の左右を指で摘み縦長の瘤とするものがある。縄文の上から捲れ返りを伴う刺突列を横に 2 列施した土器は、小波状口縁で、口唇部の角は丸みを帯びている。

**【水木沢遺跡】** 所在地：青森県下北郡大畑町字水木沢 (文献：古市ほか 1987)

下北半島の北岸、津軽海峡を臨む大畑町水木沢遺跡では、竪穴住居跡 17 棟と小竪穴遺構 3 基からなる後期後葉の集落跡が検出された。本遺跡の場合、突瘤文土器は出土していないが、北海道の土器との関係を追求すべき刺突文土器や縄文地沈線文手法を用いた土器が認められる。特に注目すべきは、第 2 号竪穴住居跡床面と第 5 号竪穴住居跡出土の一括資料である。

第 2 号竪穴住居跡の床面出土土器では、頸部に無文帯を持ち、胴部上半の文様帯には縄文地沈線文手法により背中合わせの弧線文が展開する装飾深鉢が注目される (第 7 図 30)。

第 5 号竪穴住居跡から出土した土器には、貼瘤文とともに様々な形で刺突文が盛んに用いられている (第 7 図 36～40)。刺突は、円管を器面に直角に押しあてたもの、同じく横方向から斜めに突いたもの、先端が角張った施文具を用いたもの、粘土が柔らかいうちに連続的に施し刺突の左右どちらか片側に粘土の捲れ返りを伴うものなど多様である。第 5 号竪穴住居跡からは晩期の土器も出土しており、刺突文の見られる土器の一部は晩期に含まれる点は注意を要する。

### (3) 南部地方

**【風張 (1) 遺跡】** 所在地：青森県八戸市大字是川字犹森

(文献：藤田 1991、小笠原・村木 1991、村木・小久保 2003)

新井田川下流域に位置する風張 (1) 遺跡は縄文時代後期中葉から後葉の大集落で、多数の住居跡から良好な一括資料が出土している。突瘤文土器こそ出土していないものの、北海道の土器に由来すると考えられる特徴を持った土器が、G23 グリッド第 7 号竪穴住居跡床面、2D59 グリッド第 32 号竪穴住居跡、LMN2・3 グリッド第 64 号竪穴住居跡の各出土資料のなかに僅かながら確認できる。

G23 グリッド第7号竪穴住居跡の床面出土資料では、口縁部に雑な鋸歯状の文様を施した鉢（第7図41）や縄文を地文とし口縁部にのみ巻れ返りのある刺突列を施した粗製の深鉢（同42）に、突瘤文土器群に特有の特徴が看取される。

2D59 グリッド第32号竪穴住居跡出土資料では、口縁部と胴部上半の文様帯に鋸歯文を挟んで上下に貼瘤を伴う縄文帯を配した装飾深鉢が注目される（第7図43）。この土器は文様だけでなく、頸部に幅広の無文部を有するという文様帯構成までもが突瘤文・刺突文土器群に共通する。

LMN2・3 グリッド第64号竪穴住居跡出土資料では、小波状口縁で口縁部の文様帯に3条の刺突列を施した深鉢（第7図44）に突瘤文・刺突文土器群の影響が認められる。

### 3. 東北北部の縄文時代後期後半の時期区分と突瘤文・刺突文土器群の編年的位置

#### ①東北北部における縄文時代後期後半の時期区分

東北北部における後期縄文土器編年は、1968年、岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書『岩木山』のなかで、十腰内遺跡出土資料を標式として、磯崎正彦氏が設定した第Ⅰ群から第Ⅵ群土器まで6階梯からなる変遷案（以下十腰内編年と呼ぶ）を基礎としている。この編年案は、関東、東北南半、北海道など東日本全域を視野に入れ、各地の土器型式との併行関係に配慮したものであった。その一方、磯崎氏自身が十腰内遺跡の報告書の中で「第Ⅱ群土器から第Ⅴ群土器までのように層位関係がまったく崩れていて、時代的な新古の判別がつけにくいものは他地方の類似した土器などに対比して順位を決めた」と述べているように、十腰内遺跡出土土器は、標式資料としては適正を欠くものであった。また、提示された資料の数も少なく、各土器群の型式内容が必ずしも明確でないため、その後の研究において、各土器群に対して研究者間で異なる理解が生じ、それが混乱を生む原因となった。

鈴木克彦氏は、十腰内編年を尊重しながらもそれを批判的に発展継承し、新たな資料によりその欠を補う形で土器編年の再構築をめざし、積極的な発言を行ってきた（鈴木1996、97b、98a、98b、99bなど）。その結果、東北北部では鈴木氏により様々な後期縄文土器の型式設定がなされたが、未だそれが定着するに到っていない。筆者は鈴木氏の変遷観は大筋で支持するものの、鈴木氏が設定した土器型式名称は現時点では使用しないとの立場をとる。それは型式設定に対する基本的な姿勢が筆者と鈴木氏とで異なるからである。いうまでもなく土器型式は、時間的・空間的に隣接する他型式の土器との差異を明らかにし設定されるべきであり、空間的広がりに関しては、分布域が明示されるべきである。しかしながら、鈴木氏によって設定された土器型式の大部分は、地域的広がりが明示されておらず、同時期に隣接した地域に分布する土器型式間の違いも不明瞭である。

本論で扱う本州出土の突瘤文・刺突文系土器群は、後期後半から晩期前葉に位置づけられ、東北北部の土器型式としては、鈴木氏のいう「十腰内4式」から晩期の「大洞BC式」の時期に相当する。後期後半の土器型式編年に関しては、別稿を予定しており詳細はそちらに譲るが、型式名称はともかく、所謂「瘤付土器」については、良好な一括資料を検討した結果、後期中葉から末葉まで6期の変遷が捉えられるものと考えている（表1）。地域差の検討が不十分なため、型式名称を関することが出来ず、甚だ中途半端な形であるが、本稿で扱う突瘤文・刺突文系土器群の年代を論じる上で不可欠であることから、単に「時間的区分を指し示す物差し」として、東北北部（津軽・下北、馬淵川・新

表1 東北部瘤付土器の変遷階梯

※太字は「突瘤文・刺突文土器群」を含む資料

時期	下北地方・津軽地方	南部地方(馬淵川・新井田川流域)
1 十腰内4群相当	平館村尻高(4)遺跡第4号堅穴住居跡 浪岡町中屋敷遺跡A区IV層の一部 岩木町湯ノ沢遺跡第1号堅穴住居跡 弘前市十腰内2遺跡A区1号住居跡	八戸市丹後谷地遺跡第46号堅穴住床～埋2層 八戸市風張(1)遺跡H17グリッド第29号堅穴住居跡 八戸市風張(1)遺跡Z22グリッド第35号堅穴住居跡 八戸市風張(1)遺跡F20グリッド第40号堅穴住居跡 八戸市風張(1)遺跡F26グリッド第42号堅穴住居跡 八戸市風張(1)遺跡D19グリッド第20号堅穴住居跡 八戸市風張(1)遺跡RST28～30グリッド第30号堅穴住居跡 軽米町大日向II遺跡SA06床面 軽米町大日向II遺跡SA35
2 馬場瀬段階	今別町ニツ石遺跡第3号堅穴住居跡 今別町ニツ石遺跡第2号堅穴住居跡 浪岡町中屋敷遺跡A区IV層の一部	八戸市丹後谷地遺跡第60・61号堅穴住居跡床面 八戸市風張(1)遺跡T22・23グリッド第8号堅穴住居跡 八戸市風張(1)遺跡I21グリッド第32号堅穴住居跡床面 八戸市風張(1)遺跡C56グリッド第33号堅穴住居跡 八戸市風張(1)遺跡L31～N32グリッド第28号堅穴住居跡 南郷村馬場瀬遺跡跡1・3・7・10・13～15号遺構 軽米町大日向II遺跡SA46・HI-2a住居跡
3 中屋敷段階	大畑町水木沢遺跡第8号堅穴住居跡 大畑町水木沢遺跡第11号堅穴住居跡 浪岡町中屋敷遺跡SI 01・A区Ⅲ層 弘前市砂沢遺跡2a号住居跡	八戸市風張(1)遺跡E27グリッド第5号堅穴住居跡 軽米町大日向II遺跡SA07床面～埋土下部 軽米町大日向II遺跡SA08床面～埋土下部 軽米町大日向II遺跡I1・I12住居跡 軽米町大日向II遺跡H14住居跡床面～e層埋土下位 軽米町長倉I遺跡E26土坑 軽米町馬場野II遺跡KV02・MIV04住居跡 軽米町君成田IV遺跡C61住居跡・D54住居跡床面 野田村根井貝塚1号住居跡床面 野田村根井貝塚2号住居跡埋土4～6層
4 滝端段階	平館村尻高(4)遺跡第6号堅穴住居跡 むつ市大湊近川遺跡第101号堅穴住居跡 むつ市大湊近川遺跡第102号堅穴住居跡 むつ市大湊近川遺跡第105号堅穴住居跡 むつ市大湊近川遺跡第107号堅穴住居跡 むつ市大湊近川遺跡第108号堅穴住居跡 大畑町水木沢遺跡第2号堅穴住居跡床面 大畑町水木沢遺跡第10号堅穴住床～埋3・4層 弘前市砂沢遺跡2b号住居跡	八戸市風張(1)遺跡G23グリッド第7号堅穴住居跡床面 八戸市風張(1)遺跡2D59グリッド第32号堅穴住居跡 八戸市風張(1)遺跡2E37グリッド第12号堅穴住居跡 八戸市風張(1)遺跡J19グリッド第27号堅穴住居跡 八戸市風張(1)遺跡2D39グリッド第8号堅穴住居跡 八戸市風張(1)遺跡G2・3, H12～4グリッド第51号堅穴住居跡 八戸市風張(1)遺跡GH4・5グリッド第54号堅穴住居跡 八戸市風張(1)遺跡E1, FG0～2グリッド第63号堅穴住居跡 八戸市風張(1)遺跡GHI2～4グリッド第71号堅穴住居跡 八戸市風張(1)遺跡J26～L27グリッド第91号堅穴住居跡 八戸市風張(1)遺跡UVW4～7, X5グリッド第100号堅穴住居跡床面 八戸市風張(1)遺跡UV15～17グリッド第113号堅穴住居跡 階上町滝端遺跡H9年度第4号住居跡 階上町滝端遺跡H10年度第3・4・5・9・13・14・15・17・18号住居跡 軽米町大日向II遺跡SA43・44床面, JV01住居跡 軽米町長倉I遺跡I18土坑4 一戸町小井田IV遺跡DII-3住居跡
5	むつ市大湊近川遺跡第203号堅穴住居跡 むつ市大湊近川遺跡第206号堅穴住床面 むつ市大湊近川遺跡第102・120・141号土坑 中里町深郷田遺跡「II-2」	八戸市風張(1)遺跡LMN2・3グリッド第64号堅穴住居跡 八戸市風張(1)遺跡FG5～7, H6・7グリッド第75号堅穴住居跡 軽米町大日向II遺跡SA51床面～埋土下部 軽米町大日向II遺跡SA41床面 軽米町長倉I遺跡F12住居跡・I17土坑8号
6		三戸町沖中遺跡SK10・SK11 軽米町駒板遺跡ⅢC87-5土坑

井田川流域)の土器一括資料とその年代的位置づけをあえてここに提示した。

第1期は、瘤付土器の初源期にあたり、時期的には鈴木氏の「十腰内4式」や「浜松2式」、あるいは「エリモB式」(大場・扇谷1953、鷹野1981)などの時期に相当する。北海道ではこの時期に突瘤が登場する。

第2期は、鈴木氏の「十腰内5a式」の時期に該当し、東北地方中部の「西ノ浜式」古段階(関根1993)、北海道では「堂林式」の古手(註2)に併行する。本段階の最も充実した一括資料が出土した青森県南郷村馬場瀬遺跡(北林・工藤ほか1982)にちなみ、「馬場瀬段階」と仮称する。

第3期は、鈴木氏の「十腰内5b式」・「同5c式」の時期に該当し、東北中部の「西ノ浜式」新段階(関根1993)、北海道では「堂林式」の中段階に併行する。青森県浪岡町中屋敷遺跡(工藤・竹ヶ原2003)では、SI01住居跡とA区Ⅲ層から概期の良好な一括資料が出土しており、本稿では第3期を「中屋敷段階」と仮称する。なお、中屋敷遺跡A区包含層では、下層のⅣ層から第1期～第2期の資料が出土しており、「馬場瀬段階」から「中屋敷段階」への変遷を、層位的に捉えることができる。

第4期は、所謂「貼瘤の最盛期」に相当し、器面を多くの瘤が飾る土器が盛行する。鈴木氏のいう「風張式」の大部分は本段階に当たると考えられるが、若干の異同もある。鈴木氏が標式とした八戸市風張遺跡では、ここでいう第1期～第5期まで、各時期の資料が住居跡等から出土している。一方、階上町の滝端遺跡(森2000)の場合、包含層から出土した土器は年代幅が広いものの、住居跡資料に関しては、第4段階の資料に限定しうるため、本稿では、第4期を「滝端段階」と仮称した。東北中部では、田柄貝塚第Ⅴ群土器に代表される「宮戸Ⅲa式」が、北海道では「堂林式」の新しい部分と併行関係にある。なお、弘前市砂沢遺跡では、本期に属する2b号住居跡が、第3期に位置づけられる2a号住居跡の上に構築されており、「中屋敷段階」から「滝端段階」への変遷を層位的に捉えることができる。

第5期は、北海道から東北南部にいたる広い地域で、基本的には、瘤の多くが刺突(いわゆる「爪形」を含む)に変化する段階として理解できる。東北中部では、田柄貝塚第Ⅵ群土器に代表される「宮戸Ⅲb式」古段階が、北海道では、知内町湯の里3遺跡出土土器を標式として設定されている「湯の里3式」(千葉ほか1986)や、千歳市キウス4遺跡Ⅴa層出土土器、苫小牧市柏原5遺跡B区2B層一括出土土器(佐藤ほか1997、工藤2000)が時期的に併行関係にある。むつ市大湊近川遺跡では、第5期に属する120号土坑が、第4期の第101号住居跡の上に構築されており、第4期から第5期への変遷を追うことができる。

第6期は、後期最終末に位置づけられる。前段階に盛行した刺突は、東北地方では一般に縦位の刻目列へと変化する。本期の最も充実した一括資料である岩手県軽米町駒板遺跡ⅢC87-5土壙出土資料(岩手県埋文1986)にちなんで「駒板段階」と仮称する。時期的には東北中部の「宮戸Ⅲb式」新段階に併行する。北海道では、千歳市美々4遺跡のⅡB-1層から併行する時期の良好な資料が出土している(熊谷・藤井1998)。

次ぎに以上の時期区分に従い、本州出土の突瘤文・刺突文土器群について歴史的な位置づけを試みることにする。

## ②本州出土の突瘤文・刺突文土器群の編年的位置

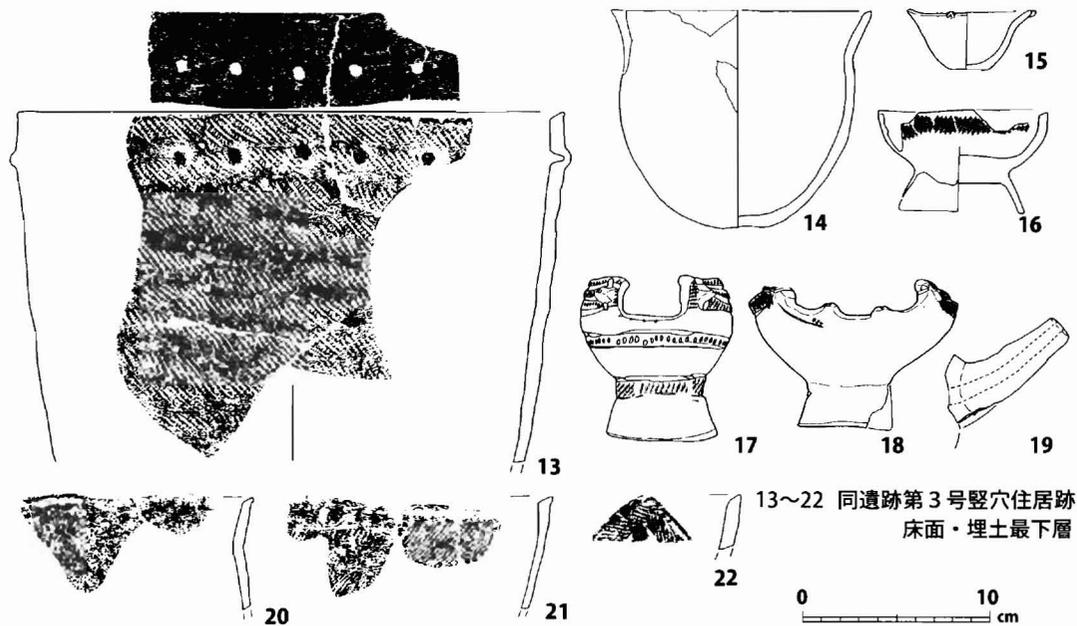
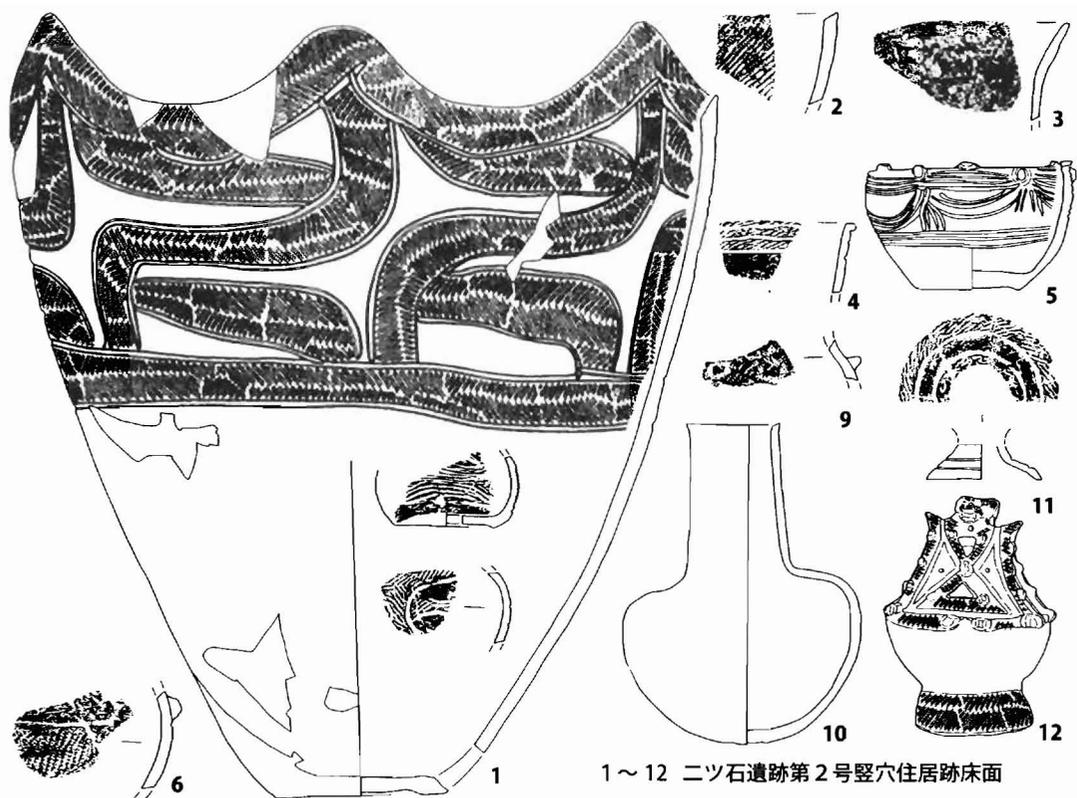
本州から出土した突瘤文・刺突文系土器群で最も古く位置づけられるのは、今別町二ツ石遺跡第3号竪穴住居跡出土資料である(第6図)。この資料は、同時存在の可能性が高い2号竪穴住居跡出土資料とともに第2期(馬場瀬段階)に位置づけられる。突瘤の施された土器は内削ぎの口縁を有する深鉢1点のみであり、本段階では本州北部において突瘤文土器は客体的な存在であったと思われる。この段階にはまだ刺突文土器は登場していない。続く第3期(中屋敷段階)に位置づけられる突瘤文土器は今のところ見当たらない。その存在は確実視されるものの、第2期同様、主体をなす貼瘤文土器に少量混じる程度であったと思われる。

第4期(滝端段階)には本州北部から出土する突瘤文・刺突文土器が急増し、遺跡毎に程度の差こそあれ、下北や津軽北部では貼瘤文土器を凌駕する存在となる。本期に属する一括資料としては平舘村尻高(4)遺跡第6号竪穴住居跡出土資料、むつ市大湊近川遺跡第101・102・105・107・108号竪穴住居跡出土資料、大畑町水木沢遺跡第2号竪穴住居跡床面出土資料・第10号竪穴住居跡床面～埋土3・4層出土資料がある(第7・8図)。八戸市風張(1)遺跡のG23グリッド第7号竪穴住居跡床面ならびに2D59グリッド第32号竪穴住居跡出土資料は第4期の良好な一括資料であるが、前述のように、貼瘤文土器を主体としながらも、文様帯の構成や意匠に突瘤文・刺突文土器の影響を受けた土器(折衷土器)が存在する。平賀町小金森遺跡から出土した突瘤のある略完形の深鉢は、その型式的特徴や、直接共伴したとは言えないが調査区内で出土した他の貼瘤文土器からみて第4期に位置づけられよう。小金森遺跡や風張(1)遺跡の資料は、津軽南部や馬淵川・新井田川流域でも突瘤文・刺突文土器やその影響を受けた土器が客体的ではあるが存在していたことを示している。

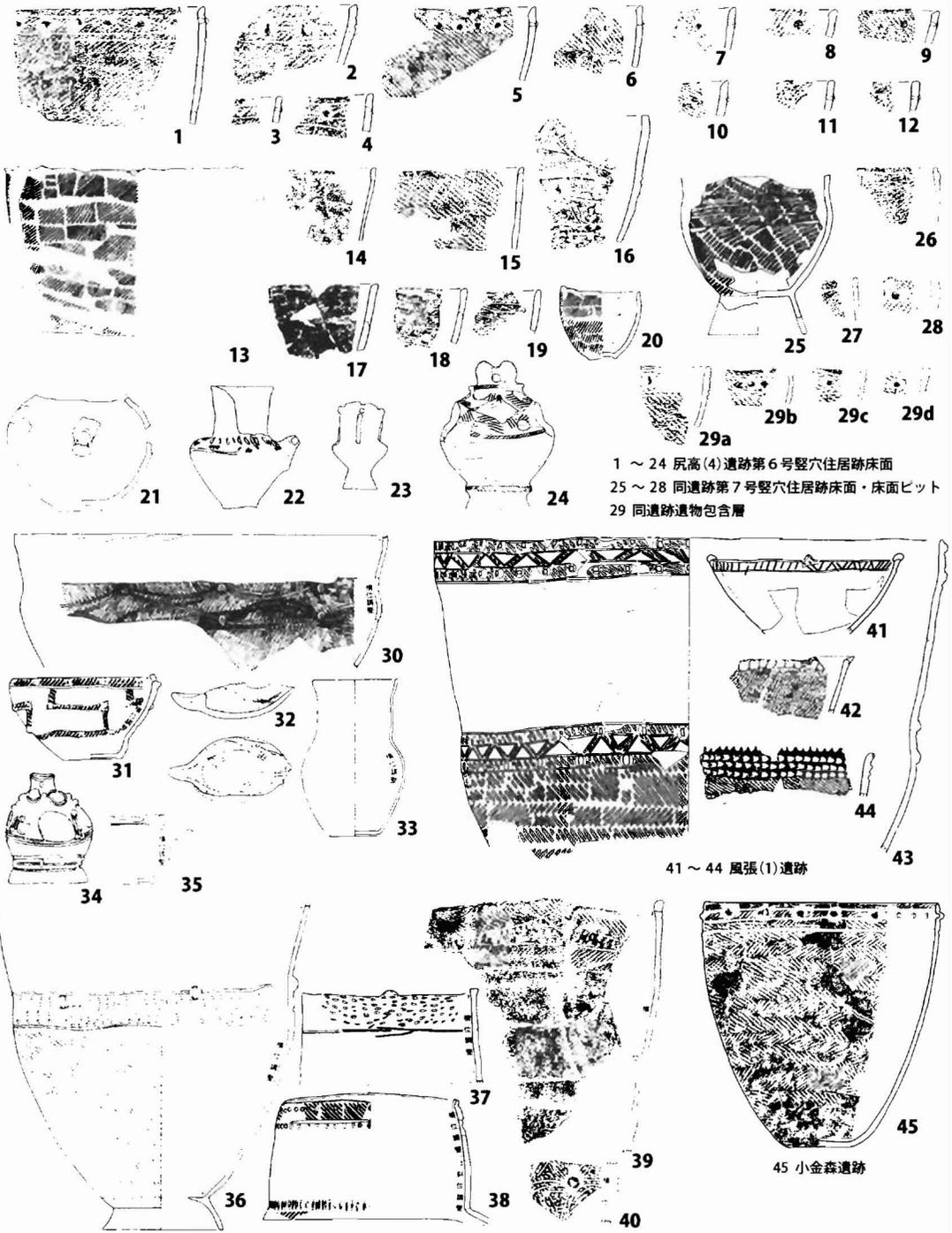
第5期にも下北と津軽北部では、突瘤文・刺突文土器群が貼瘤文土器を上回る存在であることが、本稿で紹介した中里町深郷田遺跡「II-2」出土土器やむつ市大湊近川遺跡第203号竪穴住居跡、同第206号竪穴住居跡床面、同102・120・141号土坑の各出土資料から窺える(第9図)。これらの資料は、北海道知内町湯の里3遺跡出土土器を標式として設定されている「湯の里3式」(千葉ほか1986)に極めて類似しており、内面の調整が若干丁寧な点を除けば基本的に変わるところがない。なお、本期に属する八戸市風張(1)遺跡のLMN2・3グリッド第64号竪穴住居跡一括出土資料には、前述のように口縁部の文様帯に刺突列を施した深鉢が含まれており、第4期に引き続き第5期にも馬淵川・新井田川流域にまで突瘤文・刺突文土器の影響が及んでいたことが判る。

津軽・下北地方では第6期すなわち後期最終末段階の良好な一括資料を欠いており、土器の様相も判然としない。第6期に属する突瘤文・刺突文土器はこれまで確認できておらず、その存在は確実視されるものの、津軽・下北においても、前段階に比べ馬淵川・新井田川流域や東北地方中部の土器との共通性が高まった可能性が高い。

晩期の資料には、大間町ドウマンチャ貝塚出土の突瘤文土器と刺突文土器、三厩村宇鉄遺跡出土の突瘤文土器、中里町深郷田遺跡11号ピット・木造町亀ヶ岡遺跡・黒石市一ノ渡遺跡の各遺跡出土の刺突文土器がある(第10図)。このうち、宇鉄遺跡例は型式学的特徴から「大洞B1式」期に、ドウマンチャ貝塚例は共伴した土器から「大洞B2式」期に属すると判断されよう。深郷田遺跡11号ピット・亀ヶ岡遺跡・一ノ渡遺跡の刺突文土器は、北海道の上ノ国町竹内屋敷遺跡、松前町高野遺跡な



第6図 本州北部の突瘤文・刺突文土器 1 (瘤付土器第2期)



1 ~ 24 尻高(4)遺跡第6号竪穴住居跡床面  
 25 ~ 28 同遺跡第7号竪穴住居跡床面・床面ビット  
 29 同遺跡遺物包含層

41 ~ 44 風張(1)遺跡

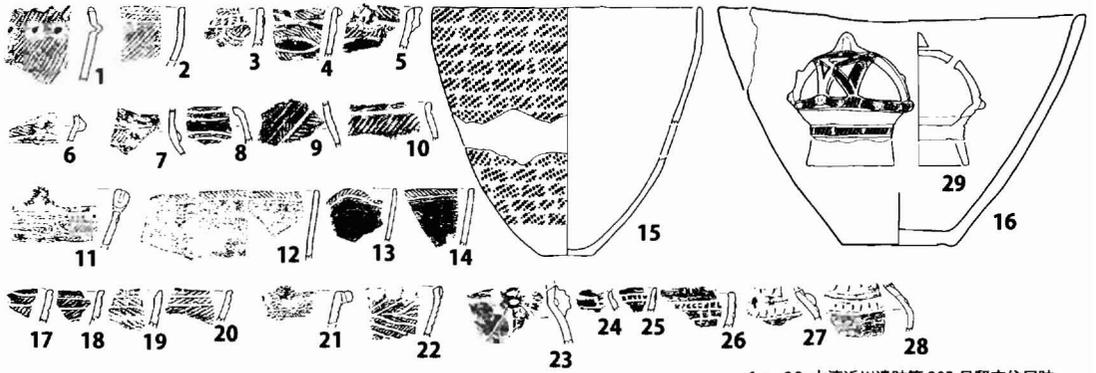
45 小金森遺跡

30 ~ 35 水木沢遺跡第2号竪穴住居跡床面  
 36 ~ 40 同遺跡第5号竪穴住居跡

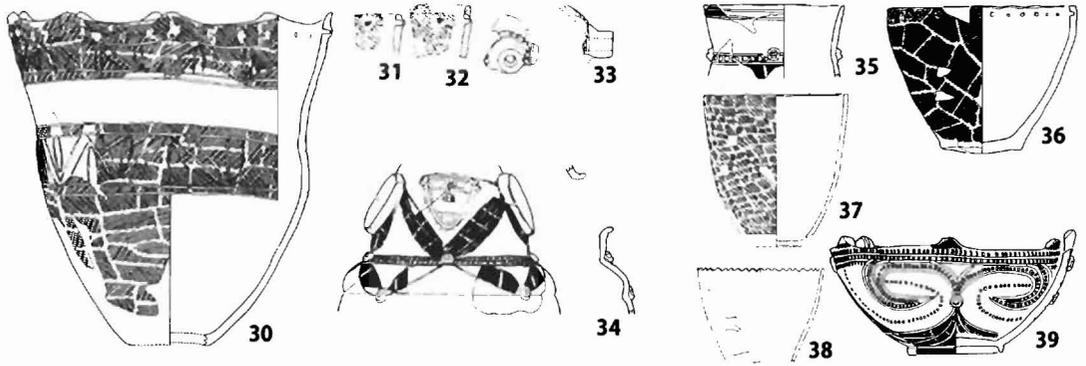
第7図 本州北部の突瘤文・刺突文土器2 (瘤付土器第4期)



第 8 図 本州北部の突瘤文・刺突文土器 3 (瘤付土器第 4 期)

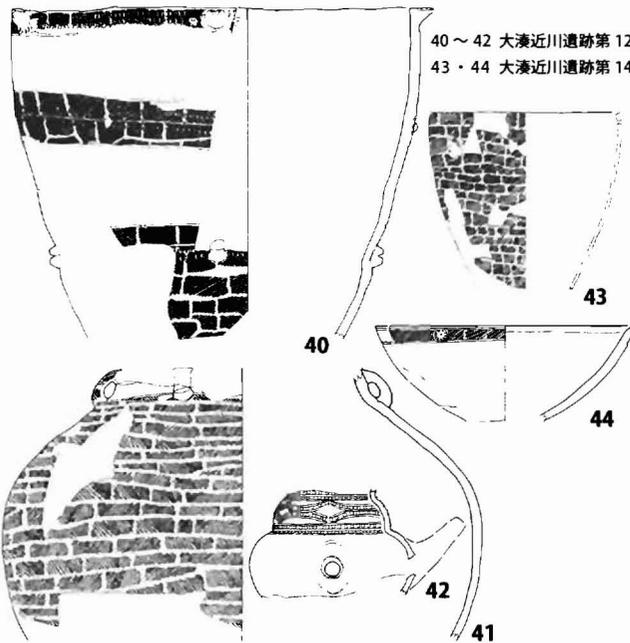


1 ~ 29 大湊近川遺跡第 203 号竪穴住居跡



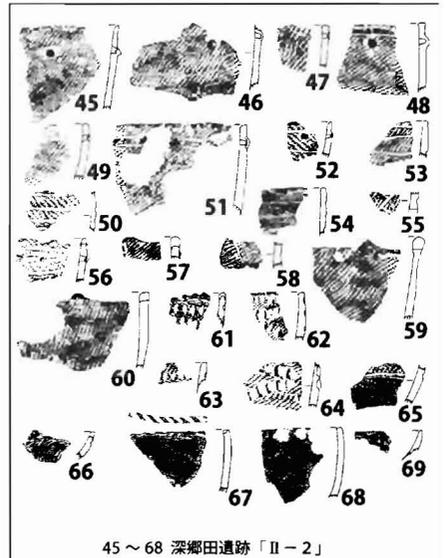
30 ~ 34 大湊近川遺跡第 206 号竪穴住居跡

35 ~ 39 大湊近川遺跡第 102 号土坑



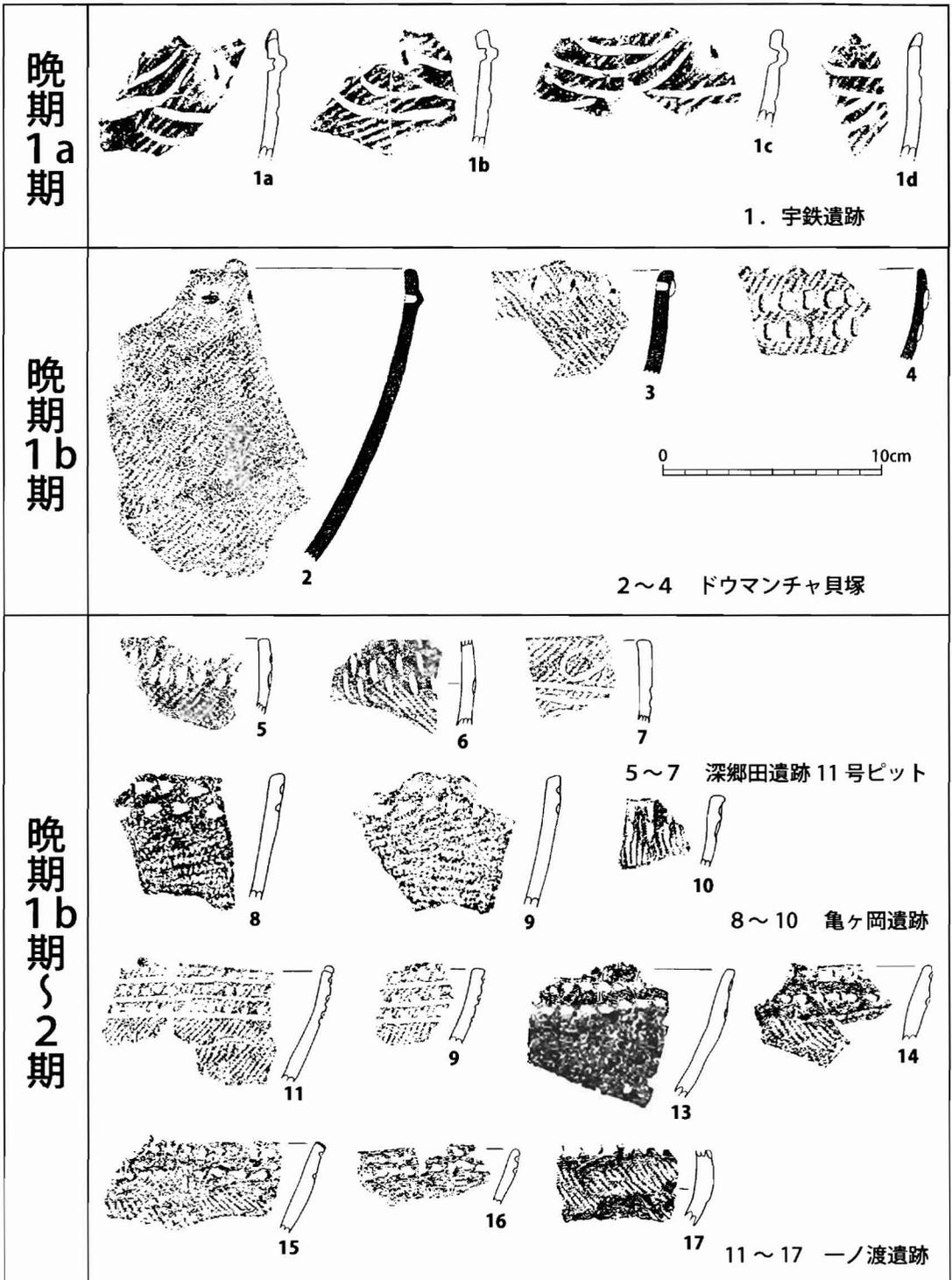
40 ~ 42 大湊近川遺跡第 120 号土坑

43・44 大湊近川遺跡第 141 号土坑



45 ~ 68 深郷田遺跡「II-2」

第 9 図 本州北部の突瘤文・刺突文土器 4 (瘤付土器第 5 期)



第10図 本州北部の突瘤文・刺突文土器5 (晩期)

どに類例が見られ、「大洞 B2 式」期から「大洞 BC 式」期に位置づけられる。晩期になると、下北・津軽北部ともに突瘤文・刺突文土器群は急速に後退し、極めて客体的な存在となる。

#### 4. 結語

本稿では、本州北部から出土している突瘤文・刺突文系土器群に着目し、その編年的位置づけと変遷を明らかにしてきた。北海道では突瘤文は「エリモ B 式」の段階に登場するとされるが、本州北部では、「エリモ B 式」期に相当する時期、すなわち瘤付土器の第 1 期にはまだ確認されず、続く第 2 期（北海道では「堂林式」の古段階に相当）に初めて現れることが判明した。それ以後、晩期前葉「大洞 BC 式」期に到るまで、大局的には突瘤文から刺突文へと変化しながらも、東北北部では各時期突瘤文・刺突文土器が出土する。これまで、津軽北部や下北では後期後半のまとまった資料が乏しい上、判別が容易な突瘤文にばかり注目が集まり、それに伴う突瘤以外の土器の検討が不十分であったため、本州北部で出土する突瘤文土器は特異な存在と見られがちであった。しかし、これまで述べてきたように、津軽北部や下北の突瘤文土器を含む土器群には、突瘤文以外にも刺突文や縄文地沈線手法による文様など北海道の土器と共通する要素が確認された。殊に後期後葉、第 4 期・第 5 期の津軽北部や下北では、所謂貼瘤文土器は客体的で、むしろ突瘤文・刺突文土器群が主体をなしていたことが明らかとなった。また同時期の津軽南部や南部地方では客体的な存在ながらも突瘤文・刺突文系土器群とその影響を受けたと思われる土器が確認された。

この時期、津軽北部・下北で主体をなす突瘤文・刺突文系土器群は、道南から出土するそれと文様が類似するだけでなく、施文方法・調整・焼成など基本的な土器作り技術体系そのものを共有している。こうした現象は、黒曜石などモノの運搬に伴う日常的な交流だけでは説明が付きにくい。後期後葉には津軽海峡を越えて北からヒトの移住の頻度が高まった可能性が高い。これが北から南への一方向的な動きなのか、それとも南北相互に行われた事象なのかを見極めるには、今後、道南から出土する概期の土器群に、本州北部の瘤付土器の影響がその程度認められるか検証を要する。

後期末葉から晩期前葉にかけても引きつづき津軽・下北では突瘤文・刺突文系土器群が出土するが、その存在は極めて稀で、後期後葉の在り方とは根本的な違いがある。以前から指摘されているように、晩期前葉には石狩低地帯より西側の広範囲に「大洞系ないし類大洞系の土器」が分布しており、南から北へ海峡を越えた文化的影響が強まった時期と見られる。津軽・下北から発見されるこの時期の突瘤文・刺突文系土器群は、そうした文化的影響が必ずしも南から北へ一方向的にあったのではないことを物語っている。

#### 謝辞

深郷田遺跡出土土器の資料調査ならびに公表に際して、中里町立博物館の斉藤淳学芸員には格段のご配慮を頂いた。また、本稿をまとめるにあたり、次の方々にお世話になった。末筆ではありますが、感謝申し上げます。

赤石慎三、上屋真一、佐藤一夫、佐藤剛、鈴木克彦、福田友之、藤沼邦彦（敬称略）

註1 大湊近川遺跡と尻高(4)遺跡では、京都大学の藁科啓男・東村武信両氏により、蛍光X線分析法により出土した黒曜石の産地同定が行われている。それに抛れば、大湊近川遺跡では出土した石器の9.3%が黒曜石で、産地別に見た場合、置戸産33%、赤井川産23%、出来島産16%、十勝産15%、白滝産および男鹿産各1%、不明11%となり、黒曜石に関しては北海道産のものが7割を越す(三宅ほか1987)。尻高(4)遺跡の場合、19点の黒曜石が分析され、赤井川産15点、置戸産3点、十勝産1点と、全て北海道産であることが確認されている(福田1990)。

註2 本稿では、所謂「堂林式」の細分に関して、盛土遺構出土土器に基づきキウス4遺跡の調査報告書(佐川ほか1998・2003a・2003b、高橋ほか2001)の中で提示された、古・中・新の3段階区分案を採用する。

#### 引用・参考文献

- 青森県立郷土館 1984 『亀ヶ岡石器時代遺跡』 青森県立郷土館・考古―第6集
- 石本省三・藤田登 1988 『釜谷2遺跡Ⅱ』 戸井町教育委員会
- 一町田工・島山昇 1984 『一ノ渡遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書79
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1986 『駒板遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書98
- 上屋真一ほか 2003 『カリンバ3遺跡』(1)・(2) 恵庭市教育委員会
- 江坂輝弥・渡辺誠・高山純 1967 「大間町ドウマンチャ貝塚」『下北―自然・文化・社会―』129～144頁  
九学会連合下北調査委員会
- 遠藤正夫ほか 1989 『二ツ石遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書117
- 大場利夫・扇谷昌康 1953 『エリモB遺蹟』 日高教育研究所
- 大場利夫・松崎岩穂・渡辺兼庸 1961 『上ノ国遺跡』 上ノ国町教育委員会
- 大場利夫・渡辺兼庸 1966 「北海道爾志郡三ツ谷貝塚」『考古学雑誌』51-4 13～27頁
- 小笠原忠久 1988 『釜谷2遺跡Ⅰ』 戸井町教育委員会
- 小笠原善範・村木淳 1991 『風張(1)遺跡Ⅱ』 八戸市埋蔵文化財調査報告書42
- 岡田康博ほか 1985 『尻高(2)・(3)・(4)遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書89
- 葛西励 1974 『青森県平賀町唐竹地区埋蔵文化財発掘調査報告書』 平賀町教育委員会
- 葛西励・高橋潤・児玉大成 1995 『宇鉄遺跡発掘調査報告書』 三厩村教育委員会
- 工藤清泰・竹ヶ原亜希 2003 「平成14年度中屋敷遺跡発掘調査報告書」『平成14年度浪岡町文化財紀要』Ⅲ  
55～126頁
- 北林八洲晴・工藤大ほか 1982 『馬場瀬遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書70
- 工藤肇 2000 「柏原Ⅰ～Ⅳ式土器について」『苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報』2 9～28頁
- 熊谷仁志・藤井浩 1998 『美沢川流域の遺跡群ⅩⅨ 美々4遺跡』 北海道埋蔵文化財センター調査報告113
- 国立歴史民俗博物館 2001 『落合計策縄文時代遺物コレクション』 国立歴史民俗博物館資料目録1
- 小林敬ほか 1980 『オクシベツ川遺跡発掘調査報告書』 知床博物館協力会
- 佐藤一夫ほか 1997 『柏原5遺跡』 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財調査センター
- 佐川俊一ほか 1998 『千歳市キウス4遺跡(2)』 北海道埋蔵文化財センター調査報告書124
- 佐川俊一ほか 2003a 『千歳市キウス4遺跡(9)』 北海道埋蔵文化財センター調査報告書180
- 佐川俊一ほか 2003b 『千歳市キウス4遺跡(10)』 北海道埋蔵文化財センター調査報告書187
- 鈴木克彦 1996 「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究」『考古学雑誌』81巻4号 1～57頁
- 鈴木克彦 1997a 「注口土器の研究」『研究紀要』第2号 1～38頁 青森県埋蔵文化財調査センター
- 鈴木克彦 1997b 「東北北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・3」『北奥古代文化』第26号 1～60頁
- 鈴木克彦 1998a 「東北北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・2(上)」『考古学雑誌』83巻2号 1～45頁
- 鈴木克彦 1998b 「東北北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・2(下)」『考古学雑誌』83巻3号 30～65頁
- 鈴木克彦 1999a 「北海道渡島・松山地域の後期前～中葉の編年」『國學院大學考古学資料館紀要』第15輯 4～43頁

- 鈴木克彦 1999b 「北海道渡島・桧山地域の後期後半の編年」『古代』第107号 43～63頁
- 鈴木克彦 2001 『北日本の縄文後期縄文土器編年の研究』雄山閣
- 鈴木克彦・岩渕宏子 2004 「弘前市十腰内2遺跡の発掘報告」『調査研究年報』第28号 1～36頁 青森県立郷土館
- 関根達人 1993 「西ノ浜式とその周辺」『歴史』81 65～88頁 東北史学会
- 鷹野光行 1981 「後期の土器—北海道の土器」『縄文文化の研究』4 114～122頁
- 鷹野光行 1984 「縄文時代後半期」『北海道考古学』20 47～55頁
- 高橋和樹ほか 2001 『千歳市キウス4遺跡(8)』北海道埋蔵文化財センター調査報告書157
- 千葉英一ほか 1986 『湯の里3遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告32
- 成田末五郎 1965 『中里町誌』中里町誌編纂委員会
- 野村崇・宇田川洋 1967 『長沼町幌内堂林遺跡調査報告』
- 野村崇 1984 『長沼町12区B遺跡の発掘調査』長沼町教育委員会
- 林謙作 1986 「美々4式の構成」『考古学論叢』I 273～307頁 芹沢長介先生選歴記念論文集
- 福田友之 1988 「津軽海峡と縄文文化」『津軽海峡縄文美術展図録』72～79頁 青森県立郷土館
- 福田友之 1990 「津軽海峡の先史文化交流」『伊東信雄先生追悼考古学古代史論叢』163～193頁
- 藤田亮一 1991 『八戸市内遺跡発掘調査報告書2 風張(1)遺跡I』八戸市埋蔵文化財調査報告書40
- 藤本英夫 1963 「GOTENYAMA」静内町教育委員会
- 古市豊司ほか 1978 『水木沢遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書34
- 古原敏弘 1984 『御殿山遺跡とその周辺における考古学的調査』静内町遺跡分布調査報告書2
- 三田史学会 1959 『亀ヶ岡遺蹟—青森県亀ヶ岡低湿地遺蹟の研究—』
- 峰山巖 1974 『松前町高野遺跡発掘報告』松前町教育委員会
- 三宅徹也ほか 1987 『大湊近川遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書104
- 村木淳・小久保拓也 2003 『風張(1)遺跡V第1分冊住居編1』八戸市埋蔵文化財調査報告書97
- 森淳 2000 『滝端遺跡発掘調査報告書』階上町教育委員会
- 森田知忠ほか 1977 『美沢川流域の遺跡群I』北海道教育委員会